

・衝撃的なまえがき

まえがき

僕は、小説が特別に好きではない。それを読むことも、書くことも、趣味にしたことはない。そういう人間が、「小説の書き方」を述べる。これ自体が極めて「稀な」ことだろう。ここが本書の特徴である。

この本の結論を1行で書くとすると、こうなる。

もしあなたが小説家になりたかったら、小説など読むな。

・小説観

はっきりいって、「こうすれば面白い小説が書ける」「こうすれば美文になる」というノウハウなど、すべて些末である。習字のように綺麗な文字を書ける、あるいは、間違えないで漢字が正しく書ける、というレベルの話でしかない。文章の価値、創作の価値は、そんな細かい部分にあるのではない。極端な話をすれば、たとえば文法でさえ頑なに守る必要はない。

・衝撃的な創作の速さ

こんな僕が、40歳になる少しまえに突然、小説を書いた。練習したこともないし、趣味で書いたこともなかったけれど、執筆してみた。文字を書くことも苦手なので、もちろんワープロ。漢字が書けない僕にとっては、ワープロはまさに「利器」である。この処女作が、講談社から1996年に発行された『冷たい密室と博士たち』だ

正直に言えば、僕は最初から、金になることをしようと**考えて小説を書いた**。つまり、バイトである。趣味の関係で自分がやりたいことの実現には資金が必要だった。なんとか夜にできるバイトはないか、と**考えて小説の執筆を思いついたのだ**。思いついて3日後くらいに書き始め、さらに1週間後には書き終わっていた。毎日3時間くらい書いただろうか。トータル**20時間ほどで書き上げた**。僕は**1時間にだいたい6000文字をキーボードで打つことができるので**、約12万文字だ。原稿用紙にぎっしり詰めれば300枚になる。書き上げたあと、書店へ行き、これまで立ち寄ったことがない小説雑誌のコーナーで、適当に雑誌を開いてみた。原稿を募集しているところを探したのである。

詳しい話は後述するけれど、とにかく、その半年後には僕は小説家としてデビューしていた。そして、最初の1年で3冊の本が出版され、**その年の印税は、当時の本業（国立大学勤務）の給料の倍にもなった**。それで驚いていたら、翌年には4倍になり、3年後には8倍、4年後には16倍と、まさに倍々で増えた。

こんなに儲かる仕事があっても良いのか、と思わなかったと**いったら嘘になる**。僕は特に必死で努力をしたわけではない。1日3時間以上小説の仕事をしたことはなかったし、最近では1日1時間に制限しているくらいだ。それでも、この10年間に**毎年100万部以上コンスタントに出版され**、使い切れないほどの印税が銀行に振り込まれた。僕の家族の生活はすっかり変わってしまったけれど、しかし僕自身に大して変化はない。趣味方面で、少し資金的な自由を得ただけだ。もちろん、これはとても嬉しい。

・異端を自認

僕は四半世紀にわたって国家公務員として大学で研究をしてきた。かなり個人的な仕事環境だったといえる。また、小説家もまちがいがなく個人的な職業だ。将来や社会を広く対象としていても、直接の人づき合いというものをほとんどしなくても良い。普通の職業ではこうはいかないはずだ。だから、僕がビジネスについて語ると、おそらく多くの方は「まったく、社会の現実を知らない人間が理想論ばかり語っている」と受け取るだろう。そのとおりである。そして、僕はその理想論を実際に通してきた。それが僕の人生だ。僕は、「人間関係の軋轢の中で、**なんとか自分の立場を守る**」ことが**ビジネスだとは考えていない**。それは、給料をもらうための方策かもしれないが、**ビジネス、すなわち「商売」ではない**。組織の中で自分の立場を守ることよりも、もっと広く社会のニーズを眺め、これからいかに展開していけば良いのかを考えて迅速かつ的確に手を打つ、ということが重要だ。周りの人間に好かれるために仕事をしているのではない。**理想があれば、その理想**

を抛り所にして行動する。できるかぎりそれに近づく方向を目指す。そんな甘い方針を本気で掲げるのが、僕のやり方である。自分の立場を守ることに終始すれば、立場はたしかに守られる。そして、つつがなく定年まで勤め上げることができるだろう。そういう人は「世間の厳しさ」を知ったことで、苦労を重ねた自分に満足すれば良い。僕は、そんなものを知りたいとは思わない、というだけのことだ。

いかがだろう？

この「まえがき」を読んだだけで、本書がかなり「異端」であることがご理解いただけたはずである。自分にとって価値がありそうだ、と予感された人が本書を読まれることを期待する。その予感が正しかったとしたら、それは小さな幸運だろう。

・小説を書くことになった動機

今振り返ると、幾つかの要因が重なっていたと思う。箇条書きにしてみよう。

- ①研究の最前線から一步後退せざるをえない年齢だった。
- ②大学の雑用が増え、研究がさせてもらえない。その不満が多少あった。
- ③快適な住まいを手に入れて、書斎でデスクに向かう時間が持てるようになった。
- ④子供たちがあと10年もしたら社会人になる、という未来がほぼ見えてきた。
- ⑤自分の趣味のプロジェクトをそろそろ展開させたいが、場所も資金もなかった。

ざっとこれくらいを思いつく。もともと僕は工作が大好きだったので、毎日夜になると1時間ほどは工作をしていた。いろいろなものを作った。物体や工具を扱う工作以外にも、コンピュータのプログラミングが含まれる。とにかく、なにかを作る、生み出すことはストレス解消になる。

・応募要項

さらに、「ワープロの出力でも良いが、原稿用紙と同じフォーマットにしろ」と書いてあった。どうして、そんな理不尽なことを要求するのだろうか？ 縦書きに限る、と書いてある規定も多く、びっくりした。

縦書きに限る？ 青天の霹靂である。なにしろ、ワープロの画面は横書きだ。プリントアウトも当然ながら横書き。僕は文字を縦書きで出力したことはない。手書きでも縦に文字を並べたことはない。唯一の例外は、結婚式や葬式の受付で自分の名前や住所を書くとき。縦書きを強いられるのは、あのときだけである。研究室にある書物はすべて横書き、書類もすべて横書き、ノートもなにかも、すべて横書きである。気がつく、僕が読んでいた月刊雑誌も例外なく横書きだったから、小説以外では縦書きの文字を読むこともない。小説だけが縦書きなのは、「まあ、そういう古典的な文化なのだ」と思っていたけれど、原稿にまでそれを要求するのは何故なのか？

僕が読むのはほとんど海外の翻訳本だから、どうして横書きにしないのかな、と不思議に感じていた。外国語がときどき文中に書かれているときがあつて、そこだけ横向きになって無理矢理収まっている。本を横にしなければならない。読みにくいったらない。

しかし、そんなことで文句が言える立場ではない。プリンタの関係で縦書き出力ができないので、なんとかその規定がない応募を探してみた。すると、『メフィスト』という雑誌が見つかった。ここは、枚数制限もしていなかった。これならいけそうである。どこの出版社かな、と見てみると、「講談社」とある。講談社というのは、どんな出版社なのだろうか。たしか、パトリシア・コーンウェルが講談社文庫だったような気がする。それなら、ミステリにもある程度の理解があるだろう、と考えて、この『メフィスト』の編集部宛に原稿を送ってみることにした。

・最初の本

最初の本が書店に並んだのは1996年の4月だった。僕としては文庫が良かったのだけれど、ノベルスという新書のサイズの本になった。自分が文庫しか読まないで、小説は文庫が一番と考えていたけれど、どうやら文庫というのは、ハードカバーやノベルスが出た3年後に再出版されるものらしい、と初めて知った。ノベルスなんて、今まで手に取ったことがなかったし、書店のどの場所にあるのかさえ知らなかった。

デビューしても、誰にも黙っていた（もちろん家族にはばれているが）。だいたい、小

説なんてマイナなものは、ほとんどの大衆には無関係である。読書が趣味だという人は、**鉄道が趣味の人よりもずっと少ない**。たとえば、新幹線の新しい車両が何系か知っている人の方が、今年直木賞を受賞した作家名を答えられる人の何倍もいるはずである。

このときの『すべてがFになる』は、初版が1万8000部だった。この数は、新人のデビュー作にしては（今となっては）多い方だろう。当時は、ミステリがブームだったので、こんな数になったようだ。800円の本ならば10%の80円が印税となり、 $80 \times 18000 = 144$ 万円がもらえる。本が1冊も売れなくても、印税は発行部数に対してもらえるのだ。この金額は本当に嬉しかった。バイトでこんな大金を稼いだことはない。一級建築士の講師のバイトを夜にしていたことがあるが、毎週1回、車で1時間かけて出かけていき、2時間の講義を半年間しても、20万円くらいだった。他大学の非常勤講師をして、講義を1つ受け持っても、給料は月額で3万円程度である。論文の審査をしたり、翻訳をしたりするバイトも経験があるけれど、これほどの額を短時間に稼ぐことはとうてい不可能だ。

ちなみに、この『すべてがFになる』は3年後には文庫にもなり、現在では版を重ねて累計約57万部に達している。 80×57 万=4560万円をこの1作が稼いだ計算になる。これくらいの利益は、ほかの分野（たとえば、音楽、映画、漫画、ゲーム）などでも珍しくはないだろう。けれど、小説家というのは、たった一人で、しかも非常に短時間で作品を生産できる。人件費もかからないし、スペースもいらぬ。投資もまったく不要。この効率の高さは、ちょっとほかに例がない。上手くいけば、**の話であるが……**。

・2 作目以降の難しさ

「誰でも1作は小説が書ける」という格言(?)がある。創造をしなくても、自分自身の経験を記録すれば、それが物語になる、という意味もあるだろう。

だが、2作めとなると、処女作で出きったあと、まったくゼロの状態から書かなくてはならない。もちろん、作家志望たる者、数作のストックがあるのが普通だ。すぐにスランプが訪れるようなことはないかもしれない（いずれは尽きるが）。それでも、作品に取り込まれる各種の情報は、単にネタ帳に書かれているプロットだけではない。ちょっとしたトリビア的なものから、会話に出てくる蘊蓄まで、気の利いた比喻や言い回しなど、随所で自然に現れる。1作めを書いたときには、頭に思い浮かぶものが豊富にあった。けれど、一度書いたものはもう使えない。これが2作め、3作めと、数を重ねるうちに、しだいにジレンマとなっていく。

逆にいえば、**どんどん面白い作品が書けるようになる理屈がない**のだ。あるとしたら、作家としての技能が向上する、ということだけ。だが、はたしてそんな技術を駆使しているだろうか。文章の書き方、という面では、たしかに書けば書くほど上手くなるかもしれないが、それが面白さにつながるのか、といえど大いに疑問である。

・「人間というのは、自分が望んでいる以上のものには絶対にならない」

しかし、ここで僕が述べたい

のは、「人間というのは、自分が望んでいる以上のものには絶対にならない」ということである。「デビューができればそれで充分だ」と考えている人は、デビューして消えていくだろう。「〇〇賞作家になってやる」と思わない人は、そのとおりの〇〇賞作家にはならない。芸術であれ、ビジネスであれ、この法則は適用できる。何故なら、人間の行為というのは、自分の価値観と周囲の要求の閼(せめ)ぎ合いに常に晒され、こうしたときの一つ一つの細かい判断によって道筋が少しずつ決まっていくからだ。

・小説のもつ価値

小説は、家庭用品などの実用品ではない。人間の感性を売りものにした芸術的な商品であり、歴史的に見ても特殊な存在である（この種の商品は数百年の歴史しかない）。便利さや使いやすさ、あるいはそれらの性能向上が売れるベクトルではない。では、何を目標して作るのか？ それは大変難しい問題だけれど、あえて一言でいうならば、「**新しさ**」である。

今までにないもの、珍しいもの、そういうものを消費者は無意識に求めている。また、整ったもの、安心して消費できるものは、既に「名作」として膨大な数のストックが揃っていることも念頭に置かねばならない。「**さらに生産する理由**」がどこにあるのか、を生

産者は常に考える必要があるだろう。

・ネットのロコミ

僕が採用した方針はマイナな路線であり、「隙(すき)を突く」作戦だった。大当たりはしないけれど、「今までにないものならば、ある程度のニーズがある」という観測に基づいている。これまでの世の中では、このようなマイナなものは、大宣伝でもしないかぎり存在さえ気づいてもらえない。しかし、今はネットがある。発行部数が少なくても、目にする機会がほとんどなくても、ネットのロコミでその「新しさ」なり「珍しさ」なりが必ず伝わる環境になった。ここが昔と全然違う点である。

・批判には腹が立たない

しかし、そういう批判には耐えられないという純真無垢な作者も、きっといるだろう。僕が天の邪鬼なのであって、そういう素直なタイプが普通かもしれない。ただ、そういう人は、小説家には向かないような気がする。たぶん、小説家になれないだろう。これをもう少し突き詰めると、自分の作品を人から批判されて腹が立つ人は、もう書くのをやめた方が良く、ということだ。腹が立つこと自体が、自信がない証拠だし、笑って聞き流せない思考力、想像力では、創作という行為においては明らかに能力不足だろう。

・新聞の宣伝効果

さらに、この絵本では、新聞の宣伝効果を確かめる実験もさせてもらった。全国紙に半面の大きな宣伝を載せたのである。これをするだけで何百万円も必要だ。この宣伝費は、僕が自腹を切って支払うと申し出たが、出版社の判断で、結局は出版社持ちになった。しかし、メールやネットの反響を調べたところ、新聞広告を見てこの本を買ったという人は数人しか確認できなかった。多めに見積もっても1%で、ほぼ効果がなかったと判断できた。新聞に広告が出ると、「新聞で見たよ」と声をかけられることはあるものの、それを言う人は、まず9割方、本を買ってはいない。つまり、**新聞は大衆に認知させる機能はあっても、お金を出させる機能まではない**ということか。また、本を買う人と、新聞を読む人は別の集合だと解釈しても良いかもしれない。

・「多種を経験」より「深く経験」

たとえば、小説を書くならば、できるだけ沢山の仕事に就いて、社会勉強をした方が良い、などと言う人もいるけれど、それは逆だと僕は思う。一つの職種に長く就いていれば、その中で外部からはなかなか見えない深い部分を知ることができる。その深さを体験すれば、どの職種にでも通用する人間関係の基本原則が理解できるだろう。多種を経験する必要はなく、深く経験する方が大事だし、そして難しい。このことが、中年以降に小説家に転職した人の武器になっている例は多いだろう。しかし、それでも大したものではない。

体験を重ねるよりも、人の話を聞き、人を観察することで経験は吸収できる。自分の耳で聞き、自分の目で見なければ意味がない。本を読んで体験することは、その本を書いた人間の視点に同化されるので、知らないうちに自分の個性を失う。本来の自然で素直な見方ができなくなるので、僕はすすめない。読書によって文章の書き方のテクニク的なことは学べるが、一番大事な発想の自由さを失いやすい、と思うからだ。

・「これからは、これが来る」という信念

「これからは、これが来る」という信念は、創作をする者が自分を鼓舞する最も大きなエネルギーとなりうる。この信念がなければ、ものは創れないといっても過言ではない。だから、「今これが売れているそうだから、自分もやってみよう」という後追いの姿勢では、この最大のエネルギーが欠けている。よほどのことがないかぎり、傑作が生まれることはない。稀に、後追いながら良作が生まれることがあるが、そこには、「俺なら、こうする」という反骨的な主張が必ずある。

「小説を書くなら、人の小説を読まない方が良い」というのは、何度も書いていることだし、他人の視点に囚われるリスクがあるためだが、反発するエネルギーを掻き立てる意味ではプラスになる場合もある。「私なら、こうは書かない」という動機を拾うチャンスも

たまにある。「ああ、こんなものが書きたい」という憧れがエネルギーになると考えている人は、既に他者の視点に囚われていて、クローン作品を生み出す可能性が高い。細心の注意を払って、それを防ぐことはできるけれど、その労力は実にもったいない。

・小説にはテーマなんて必要ない

こんなことを書くのも、書評ブログなどで、「この小説は面白かったけれど、なにも残らなかった」「結局は、得るものがなにもない」「テーマが何なのか、全然わからない」といった感想が横行しているからだ。おそらく、学校の「国語」の悪影響だろう。ここに断言しておこう。小説にはテーマなんて必要ない。読んだあと、残るようなものも必要ない。それを盛り込むな、とはいわないが、わざわざ異物を盛り込んで、小説の純粋性を失わせるだけだ。なにも混ざっていない小説の美しさは、読んでいるときに素晴らしく酔えて、本を閉じたときにすべてたちまち消えるものである。小説には、その自由さがあれば良い。

・作家は常に時代をリードしなければならない

僕はこのブームのときに、読者の多くの反応から「もっと本を薄くしなければ」と感じたので、自分の新シリーズでは、シンプル、ショート、スパイシィという3Sを目指して書き始めた。編集者からは「時代に逆行しているのでは」と言われたけれど、それは編集者が「遅れていた」だけのことである。ネットのおかげで、今では編集者よりも作家の方が読者に近い。その分、プログレッシブだ。否、それどころか、読者だって作家に比べれば遅れている。作家は常に時代をリードしなければならない。ニーズに応えるのではなく、ニーズを新たに作る、それが創作である。

・一番時間をかけて考えるのはタイトル

ところで、これは一般的ではないかもしれないが、僕が一番時間をかけて考えるのは、タイトルだ。作品のタイトルを考え始めてから決定するまでには、3カ月から半年くらいかかる。タイトルさえ決めれば、もう半分以上は書いたも同然と思えるほどだ。よく「どんなふうにしてタイトルを決めるのか」と問われる。しかし、「これです」というルールはない。とにかくひたすら「考える」。そして、納得がいくまで決めないことにしている。僕は、タイトルが決まらない状態で小説を書き始めることはない。あとで決めれば良い、というふうには考えない。本文ができてしまったあとに適切なタイトルをつけるなんて、それは無理な話だ。タイトルを決めれば、それに相応しい小説が書ける。その反対は極めて困難だ、と少なくとも僕は思う。

・多数読むことは無意味

読書をする人は、多数読むことを誇りにする癖があるけれど、あれは無意味だと僕は思う。大切なのは、読んでいるときに頭に思い描くイメージの情報量であって、目がなぞった文字数ではない。速読などもまったくナンセンスだ。時間をかけてゆっくり読んだ方がイメージが膨らみ、創作の役に立つ。速読というのは、早回しでゴルフや野球を見ているようなもので、それでゲームの結果がわかるだけだ。一番大切なもの、本質が失われている。ゆっくり大切に読んで、そのリズムのまま自分の創作に切り換えてはどうか。

・読書を楽しむ

僕は、それほど小説を読む人間ではない。フィクションよりもノンフィクションを多く読む。また、それ以外に研究のために技術書や学術書を読むし、趣味のために沢山の雑誌（ほとんど洋雑誌）を購読している。毎日文字を読んでいるけれど、子供のときには読めなかったものが、すらすらと読めるのが素直に嬉しい、という単純な充実感も伴っている。屋外へ出ていくより、旅行をするより、部屋に籠もって本を読んでいる時間の方が、僕にははるかに健康的である。コーヒーを飲みながら、そしてときには音楽を聴きながら読書を楽しんでいる。